

8月9日ナガサキ - 被爆の実相

2011.2.27

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉強商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

一。なぜ、広島と長崎だったのか

原爆投下都市の候補は、どのように決められたのか

- * 1945年5月10～11日に原爆投下都市の「目標選定委員会」。その後も何回も協議。
- * 基準は、原爆の威力を正確に測定できる「人口」「広さ」「平坦さ」。そして、この時点でまだ空襲が行なわれていない「無傷な大都市」。
- * この会議では、京都、広島、横浜、小倉、新潟が検討の対象となった。これらの都市は、空襲で被害をあたえることを「防止」された。長崎は7月24日に目標都市に追加。
- * その後、横浜が目標都市からはずれる。直後、横浜は大空襲に襲われる（5月29日）。京都をめぐる（文化遺産の保護のために京都は空襲がなかったというのは真実でない）
- * 日本人の精神性、天皇家の都・・・米軍内部でも京都への原爆投下は意見がわかれた
- * 降伏時期がさらに伸びていたら、京都に3つ目の原爆が落とされた可能性は十分にある。

二。長崎の原爆被害の概要

1。8月9日11時02分

小倉が投下目標だった（“たまたま”晴れてなかった）

* 爆撃機“ボックス・カー”は小倉をめざしてテニアン島を飛び立つ（9日午前3時）

* 午前10時44分小倉上空に到着するも、霞と煙で覆われ、目標地点の小倉兵器廠と小倉中心部はまったく見えなかった。

* 小倉投下をあきらめ、予備目標の長崎に向かう。長崎も雲っていたが、一瞬、雲間から目標（常盤橋＝長崎市中心部）より3kmほど北の三菱長崎兵器製作所が目視されたので、原子爆弾「ファットマン」を投下。

* “たまたま”で、数十万の人びとの運命が分かれた…



ファットマン

2。くりかえされた「この世の地獄」

プルトニウム型原爆（広島はウラン型）

長崎市松山町交差点付近の上空500メートルで炸裂

爆発エネルギーは広島原爆の1.4倍の威力だった

* 広島より死者の数（その年のうちに7万人が死亡）が少なかったのは爆心地が長崎市中心部からはずれたため。

* 広島にくらべ壊滅地域は狭かったが、破壊は徹底的だった

被爆時の長崎市の人口は24万人前後と推定されている

くりかえされた「この世の地獄」

* 死の放射線、火球（閃光）と熱戦、衝撃波と爆風…

（被爆者の証言 ～ ）



長崎上空で爆発した原子爆弾の雲。炸裂から十数分後、爆心地の南西10キロメートルから。（松田弘道さん撮影）

- 「2発目」ということが若干影響をもたらしたことも
- * 「広島に新型爆弾」の情報がすでに一定程度、伝わっていた
- * 被爆の時刻、知事以下の県防空担当責任者は、6日広島に投下された新型爆弾について災害の様相の説明を聞き、この種の攻撃に関する対策を検討中だった。

二。ナガサキ 被爆の実相

1. 学校も、医科大（病院）も、教会も
 城山小学校（爆心地の西 500 メートルにあった国民学校）
 * 8月9日は学校は夏休み中だったが、約 1500 人の児童中、1400 人余りが家庭で死亡した。
 * 被爆した校舎の一部が、現在「平和祈念館」として保存されている。長崎爆心地の原爆遺構のなかでは、一番大きな建物として保存されている。



被爆した城山小学校



亡くなった先生 1 人ひとりの写真が

- 山里小学校（爆心地から北 700 メートル）
 * こちらも当日の登校児童はなかったが、在籍児童数 1581 人のうち、およそ 1300 人が死亡したと推定されている。



山里小学校に
いまでも残る
防空壕あと

- 長崎医科大（爆心地から東 300 ~ 600 メートル）
 * 教授も、医師も、医学生も、看護婦も、看護学生も、患者も、事務職も...
 * その被害をみる（資料 ~ ）

「改めていうまでもないことであるが、心身の健康がむしばまれ傷ついた人たちを癒すことのみを使命とする病院や医学・医療の専門家を養成する医科大学が、個人としての人間の生命を守るため暴力不可侵の最小限の聖域であることは、全世界に通じる合意のはずである。大学の受けた傷は深く長期にわたった。とくに優秀な教授陣、新進気鋭の若手教官・学生をふくむ大量の人的損失による痛手は深刻だった。教育の連鎖が絶たれ、今日にいたってもその爪あとは完全に癒えていない。（略）誰もが医大が潰滅するなどと思ってもみなかった。それが全滅したのであるから、一般市民への救護がいかに遅れて悲惨であったかは想像を絶する」

（小路敏彦『長崎医科大学潰滅の日』（九ノ丸出版、1995年）

* 「看護婦として耐えられなかった」(久松シソノ婦長)

「できることは一生懸命しましたが、薬も医薬品もほとんどないため、医療らしいことは何もしてあげられず、『休養が大切です。安静にね。よく食べましょうね。元気を出してがんばりましょうね』などと言葉を添えてあげることが精一杯でした。看護婦としてほんとうに悔しい思いをしたのです。(中略)それにしても、傍らに付き添いながらにもできない無力感、あのむごたらしさ、惨めさ、悔しさは、看護婦として耐えられないことで、思い出すだけで、今も胸がうずくのです」(『凜として看護』久松シソノ著・川島みどり編、春秋社、2005年)



浦上天主堂

- * 原爆で破壊される前の浦上天主堂は、高さ 25 メートルの双塔の鐘楼をもつ東洋一といわれる教会だった。
- * 爆心地の浦上地区では、信者約 12,000 人が暮らしていたと言われているが、そのうち約 8500 人が原爆によって亡くなっている。
- * 天主堂は、一部の側壁を残してほぼ全壊となった。



被爆前の天主堂

- * 「原爆は神のご摂理」
- 永井隆博士の強い影響
- * 貴重な原爆遺構の取り壊し
- 消えた「もう一つの原爆ドーム」



被爆後の天主堂

2. 「死の同心円」(秋月辰一郎医師)

放射線による症状、救えない命

- * 放射線を多くあびた人ほど重い症状に。被爆当日から悪心(おしん)、嘔吐や下痢などの症状。2～3週間目に入ると高熱、咽喉壊疽(いんこうえそ)、皮下出血・紫斑(しはん)、脱毛などの症状を起こし、次々と死亡していった。

「地獄のような悲惨、医学と人間の無力さ」

「いったい私になにができたのか。原子爆弾という未知の巨大な悪魔に対して、なんの知識も手立てもなく、徒手空拳で立ち向かうほかなかった」

(秋月辰一郎『長崎原爆記 被爆医師の証言』)



三。平和への願いと行動 - 長崎で私が心動かされたこと

1. ふりそでの少女像（資料 ）
長崎原爆資料館の真上にある「少女像」...



2. 高校生1万人署名活動
たった1人の行動から（資料 ~ ）
そして、後輩たちに受けつがれる「思い」と「行動」
*いまは、11年目の活動が行われている
3. 長崎の被爆者のたたかい
渡辺千恵子さん、山口仙二さん、谷口稜暉（すみてる）さん...

原爆を体験していない世代でも、「伝える」継承者となれる

* 『ナガサキノート 若手記者が聞く被爆者の物語』

（朝日新聞長崎総局、朝日文庫、2009年）

さいごに：「長崎を最後の被爆地に」が被爆者の強い思い

【参考文献（紹介したもの以外で）】

『新版 ナガサキ - 1945年8月9日』

（長崎総合科学大学平和文化研究所編、岩波ジュニア新書、1995年）

『長崎の鐘』（永井隆、アルバ文庫、1995年）

『長崎原爆記 - 被爆医師の証言』（秋月辰一郎、弘文堂、1966年）

『原爆の絵 - ナガサキの祈り』（NHK長崎放送局編、NHK出版、2003年）

『ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」』（高瀬毅、平凡社、2009年）